

2010年 第8回特別講義 レポート

日時	2011年1月7日(金) 10:00~12:00
会場	(財)日本科学技術連盟・東高円寺ビル 2階講堂
テーマ	「Wモデルによる全体最適化」
講師名・所属	西 康晴氏 (電気通信大学)
司会	秋山 浩一氏 (富士ゼロックスアドバンステクノロジー株式会社)
アジェンダ	ソフトウェアの品質は低いと言わざるを得ない ・ 組織能力の低い現場の悩み ・ 品質を軸にした組織能力の向上 ・ 品質で競争に勝つための取り組みの例
アブストラクト	近年、システム障害による品質事故が大きく取り上げられ、ソフトウェア品質や品質保証への重要性が見直されつつある。品質作り込みのためのさまざまな手法や技法が存在するが、実際にそれらを導入してみたものの、なかなか品質向上に結びつかないケースが多い。本講義では、ハードウェアの世界では“至極当たり前”に理解されている考え方を見直しながら、それらをソフトウェアの世界に適用するとどうなるかを中心に、ソフトウェア開発における組織能力と全体最適化、そしてWモデルの原理と上流工程でのソフトウェア品質作り込みについて考える。

<講義を通じて感じたこと、得たこと>

1. 組織能力

耳が痛い内容でした。ソフトウェア品質はヒトに依存するという考え方は理解していたものの、ヒト依存の課題解決に向けて、コミュニケーション改善や教育の充実に漠然と焦点を当てて思い悩んできました。しかしながら、今回の「組織能力」という言葉によって解決への糸口が見えたような気がします。品質向上・コスト削減の一番の近道は組織能力の向上であり、PM/SQAが中枢となってパートナーさんやお客様を含む組織全体を改善する。その結果としてみんなが成長できる組織を作り上げ、更には競争力の高い開発を行い、Win-Winの関係を築くことが出来たら最高です。これからの私自身の課題として、「組織能力」概念の浸透・定着を進めるべく、組織能力を向上したくなるような仕組みを考え、終了後に自慢話ができるプロジェクトを目指したいと思います。

2. 「もったいない」不具合と不具合分析

以前、私が携わっていたプロジェクトでは、「もったいない」不具合の検出(確認)・修正(確認)に

掛けた手戻り工数が、自分の工数全体の約3割を占めていたことがあります。ところが、当時は誰も何も考えず、報告された不具合をただ機械的に修正していました。ソフトウェア品質で「もったいない」という言葉が登場するとは思ってもよみませんでした。非常に参考になる考え方でした。まず、「もったいない」意識を持ち、何が「もったいない」のかに気づくことが第一歩だと思います。余談になりますが、「もったいない」のように中立した含みを持つ言葉の選択することも大事なのかな、と思いました。

更に、不具合分析をしていたのにもかかわらず、分析結果が今ひとつ活かされていない気がしていたのは、「うっかりミス」で済ませていたきらいがあったからかもしれません。不具合分析において、どこまで掘り下げるべきなのかに迷うことがよくありますが、「不具合対策の内容が低コストで済む」レベルをひとつの目安にしようと思います。

3. 「Wモデル」の誤解

一般的にプロセスモデルとして紹介されているため、言葉に惑わされていました。Wモデルはプロセスモデルではなく、上述の「もったいない」を未然防止する観点(抜け、漏れ、矛盾)を上流に反映させた結果であることや、過去の誤認が解けたと同時に、Wモデルが組織能力に深く関与していることを学びました。また、Wモデルの誤解に限りませんが、自身の思考が既存の定義や一般論に固定されることが多々あるので、それに気付く機会を持つ重要性も感じました。